

今年もさらに 「強い大学」を めざして

—新年おめでとうございます。新しい年を迎え、長尾学長には2012年を振り返るとともに、新しい2013年への抱負をおうかがいいたします。まず、昨年を振り返っていただけますか。

長尾 昨年12月に衆議院選挙が実施され、政治情勢の激変が予想されます。今後の国の教育政策にどのような影響を与えるのか、それが大きな関心事です。

新政権では、以前の安倍内閣(2006～2007年)の課題であった教育改革路線を引き継ぐものと思われます。教育改革の具体的なプランはまもなく示されると思いますが、ときあたかも、大学にとっては文部科学省が示した「大学改革実行プラン」を具体化するための「ミッションの再定義」のさなかです。今後どのように推移するのかについては緊張感をもって見守っていきたいと思っています。

民主党政権時代に減らされていた運営費交付金は、新政権になったから直ちに直視されるとは思いませんが、教育を重視する安倍内閣が、今までの縮小路線とは少し違ってくれればと思ったりはするのですが…。教育改革を実行するには、何とんでも財政的な裏付けが必要となりますからね。

—昨年はスポーツや芸術分野での本学学生の活躍がありました。

長尾 関西インカレで陸上競技部員が大活躍し1部リーグに残留の快挙のニュース(5月)をはじめ、剣道女子の学生剣道日本一(7月)、ハンドボール女子のインカレ優勝(11月、2回目の全国制覇)、そして年末の12月にはアメリカンフットボール部の1部リーグ

新春 長尾学長 インタビュー



昇格という目覚ましい活躍がありました。

アメフトの今年の開幕試合は、昨年日本一になった関西学院大学といきなり対戦することになるはずですが。関西の一部リーグは強豪揃いで、大学全体でのサポート体制を早急に組んでいかなくてはと思っています。元顧問のわたしとしては、嬉しき半分、これからが大変だなという思い半分という心境です。

—昨年は、本学附属天王寺中学・高校卒業生の山中伸弥教授のノーベル賞受賞というビッグなニュースもありました。

長尾 山中教授のユーモアのある親しみやすい人柄は、本学の附属学校の教育活動の中で培われたのではないかと考えています。附属学校は世間一般で言われるような単なる進学校ではないことが多くの人々に知ってもらえたとしたら、嬉しいことです。

—教員養成系大学としてのビジョンをどのように描いておられますか。

長尾 「ミッションの再定義」でも言わせていただきましたが、本学は教員養成の単科大学の中で唯一、教養学科を有しています。その特徴を生かしつつ、特色のある力強い教員養成大学を創っていきたいと考えています。

—最後に今年のキャッチフレーズをお願いします。

長尾 昨年は「明るい大学、元気のある大学、強い大学」をめざして、「沈着冷静」をモットーにリーダーシップを発揮していきたいと申しました。今年も基本は同じですが、順番としては「強い大学」を第一に重視するというスタンスでいきたいと考えています。

(聞き手・総務広報係)



センター長と専任教員の先生方(左から若生准教授、中山准教授、赤木准教授、城地教授、向井センター長、長谷川教授)

国際センター

「留学生にやさしい大学」 をめざして

国際センターは、異文化の中で学ぶ留学生を支援するために1989年、「留学生指導センター」として設置されました。その後、2004年4月に「留学生センター」と名称を改め、2008年7月に現在の名称になりました。

センターの拠点は、柏原キャンパス共通講義棟(A棟)2階にあります。センター長室と事務担当者の部屋などがあり、隣に「国際交流室」があります。留学生が勉強したり、日本人学生が留学関連情報を閲覧したりすることができます。留学生と日本人学生が交流するスペースともなっています。

教員スタッフは、センター長と国際センター専任の5人です(別表参照)。兼任教員も9人います。センターの教員は、留学生の日本語、日本社会や日本文化に関する授業や生活に関する指導をします。また、オフィスアワーを毎日設け、留学生、および留学を希望する日本人学生の、修学上・生活上の問題について相談を受け付けています。

多様な支援メニューを用意

組織は「国際教育部門」と「国際事業部門」があります。このうち、「国際教育部門」では、本学で学ぶ留学生の学習環境を整える多彩なメニューが用意されています(①～⑨)。また、留学を希望する日本人学生のための支援業務にも取り組んでいます(⑩～⑫)。

- ① 留学生のための日本語・日本事情教育
- ② 交換留学プログラムの実施
- ③ 学習・研究に関する相談
- ④ 奨学金・授業料免除に関する相談

- ⑤ 住宅、アルバイトなどに関する相談
- ⑥ 健康に関する相談
- ⑦ チューターの指導
- ⑧ 地域のボランティアグループとの交流
- ⑨ 留学生との定期的な面談
- ⑩ 留学に関する説明会
- ⑪ 留学に関する情報提供
- ⑫ 留学生として派遣される学生の指導

一方、「国際事業部門」では、協定校との学術交流の推進、海外教育研究機関等との連携、国際協力事業の企画・推進、国際交流、国際協力に関する調査・研究、などの事業に取り組んでいます。

このほか、国際シンポジウムや、サブサハラ英語圏の理科教育研修プログラム(JICAとの共同)なども実施しています。

モットーは「きめ細かさ と手厚いケア」

モットーは、きめ細やかさと手厚いケアです。めざすのは「留学生にやさしい大学」です。

きめ細やかさといえば、「チューター制度」があります。「チューター」とは、留学生1人に対して選ばれる日本人の学生のことで、専門分野の研究の課外特別指導や、日常生活に関する助言をします。来日後間もない留学生、学部や大学院に進学して日の浅い留学生のよき相談相手にもなる同世代の若者です。

指導教員の存在も大きいです。学習上の問題、進学の問題、その他一身上の問題

についても指導・助言をします。留学生は指導教員の指示に従って勉学・研究を進めます。

日本語へのフォローも見逃せません。本学の授業と試験は日本語で実施されます。したがって、留学生は十分に日本語能力を備えておく必要があります。本学では、留学生のために日本語の授業を開講し、日本語能力の向上をはかっています。日本語・日本文化研修留学生、交換留学生、教員研修留学生のための授業も開講しています。

ユニークなのが「ランゲージテーブル」です。留学生に語学講師となってもらい、日本人の学生に語学を教えるというもので、互いに交流もできます。この他、留学生向けの「就職ガイダンス」も好評を得ています。就職のプロやOBを招いて情報提供を行い、体験談を話してもらっています。

日本文化を楽しく 体験しながら学ぶ

日本文化や伝統を学びながら、日本人学生や地域の人たちと交流することができるイベントを数多く企画実施しています。

1つは、年3回、全国各地の世界遺産などを訪れ、現地で学ぶ「日本文化研修」です。2つ目は、年1回開催している「かしわら国際交流フェスティバル」で、自国の食生活や伝統文化などを紹介します。この他にも、大相撲観戦や能楽鑑賞など年2回の「日本文化を学ぶ会」等々、多彩なイベントが用意され



国際交流フェスティバル



●向井康比己センター長

ています。

「国際化」は大学の 生き残り戦略

「大きな総合大学だと留学生の数が多く、学部ごとに対応するというかたちになって、細やかなところに目が行き届かないことが多いものです。本学は小規模さを生かして、手厚いケアが浸透しています。センターの先生方は、夜間でも緊急時には電話相談に乗るなど、24時間、親身になって対応しており、留学生の満足度は高いはずです」と向井康比己センター長は強調します。

向井センター長は教養学科自然研究講座の教授です。専門は植物遺伝学(ゲノム研究)で、アメリカ、オーストラリアでの海外経験が豊かです。2008年4月に着任しました。「国際化への戦略は待たなしです。留学生にそっぽを向かれるような大学は、これから生き残ることができないと肝に銘じるべきです。センターと学内各講座の先生方との結びつきを今後さらに強めていきたい」と話します。

当面の目標は、日本人学生と留学生との交流の機会を学内で増やすことだといいます。「在籍学生の1割を外国人することをめざしています。日本人の中に外国人学生がモザイクのようにいる、というのが国際化に対応した大学の理想像です。自然なかたちで相互に刺激を受け合うからです。本学の規模(約5,000人)からすると400~500人は必要です。現在、20か国・地域136人なのでまだまだ足りません」。また、「さらに、現在英語による授業がいくつか実施されるようになりましたが、今後もっと開講数を増やすよう要請していきたい」と意欲を語ります。

日本人学生の 留学経験は就活に有利

現在11か国・地域25大学と学生交流協定を結んでいます。日本人学生の海外留学は、交換留学・語学研修・文化研修の各プログラムともに増加の傾向にあります。その一方で、毎年開催する留学生説明会には多くの学生が参加しますが、実際に留学に踏み切る者は20%前後にとどまっているのも現状です。背景に、経済的な問題や留学期間のキャリア・ブランクの問題があり、国内の厳しい就職活動に不利な条件になるのではないかと懸念があります。

向井センター長は「留学経験は就職に不利どころかむしろ有利になりつつある」と強調します。日本社会と企業の国際化の進展が追い風となり、今後ますます英語力が求められるからです。「就職試験のエントリーシートを英文で書かせる外資系企業や、英語による面接も増えています。職場の会議はすべて英語という会社も出てきています。留学で習得した語学力は、就職の面接や



米国ECU大学でピアノ発表会に臨む本学学生(左)

キャリア面で有利なアピール条件になります」と強調します。また、「児童や生徒たちの語学力の向上をめざしており、英語コミュニケーション能力とグローバルな感覚をもった教師の育成が望まれています。そのために、本学は先導的な役割を果たさなければなりません」と語っています。

グローバルな感覚を 磨くチャンスを

交流協定校の拡大や、語学研修・文化研修プログラムの充実に力を入れるとともに、留学を希望する学生にはきめ細やかなサポートをしています。「特に交換留学生は本学を代表して行くわけですので、面接もきちんとします。費用面の負担も軽減できるよう、交換留学生のための授業料減免制度なども整備しています」。そのうえで、「国際社会を生き抜いていく学生のみなさんに機会を与えられるように、大学をあげて積極的に取り組み、世界へ送り出してあげたい」と力説します。学生がグローバルな感覚を磨くチャンスを活かせるよう、留学制度の整備と発展に全力を尽くします。

センターの情報発信のために年2回『Over the Rainbow』(オーバー・ザ・レインボー)を発行しています。また、各国語版の大学案内、海外留学ガイドブックなどのパンフレット、『国際センター年報』も参考になります。

問い合わせは【学術連携課国際係】

☎072-978-3300 fax072-978-3348

E-mail: isc@cc.osaka-kyoiku.ac.jp

URL: <http://osaka-kyoiku.ac.jp/ic/index.html>

所属 スタッ フ

国際センター長	向井 康比己	教養学科自然研究講座教授
国際センター専任教員	長谷川 ユリ	教授
	城地 茂	教授
	中山 あおい	准教授
	赤木 登代	准教授
	若生 正和	准教授
国際センター兼任教員	石橋 紀俊	教養学科日本・アジア言語文化講座准教授
	加藤 可奈衛	教員養成課程美術教育講座准教授
	小林 和美	教員養成課程社会科教育講座准教授
	住谷 裕文	教養学科欧米言語文化講座教授
	辻本 英和	教養学科社会文化講座教授
	中田 博保	教養学科自然研究講座教授
	松本 マスミ	教養学科欧米言語文化講座教授
	水野 治久	教員養成課程学校教育講座准教授
藤田 修	教養学科情報科学講座准教授	

新ルーム紹介

No.1
障がい学生
修学支援ルーム

共に学び合える
支援活動を



左から木立ルーム長、安福特任教授、支援ルームスタッフ

本学は2012年4月、障がい学生修学支援ルーム(以下、支援ルーム)を開設し、木立英行ルーム長(教授)と臨床心理士でもある専任の安福純子コーディネーター(特任教授)の2名の教員と、学生サービス課学生支援係に所属する専任の事務職員2名によって、支援ルームの業務を開始しました。(右上写真)

支援協力学生による 様々な「情報保障」

支援ルームは、障がいのある学生とその保護者からの支援要請に基づいて、一人ひとりの学生のニーズに応じた修学にかかわる支援計画を作成し、教職員とともに支援計画の実施に取り組んでいます。また情報保障は、支援ルームに登録している支援協力学生が行っています。現在の主な情報保障活動は、2人の支援協力学生がペアを組み、講義の内容をすべて2台のパソコンで専用のソフトを用いて、連携しながら文字化して情報保障を行うパソコンテイク、2人の支援協力学生がペアを組み、ルーズリーフに講義の内容を要約して筆記するノートテイク、手話通訳、代筆、代読などです。

学生と大学の連携、 新たなスタートに

障がいのある学生に対する対応は、1981年に大学が設置した「障害者受入懇談会」に始まります。講義等における情報保障活動は、1989年に発足した学生ボランティアサークルの主体的な支援活動を大学がバックアップしてきましたが、十分な支援活動が実施されていないとの指摘がありました。修学支援を任務とする担当部署の誕生は長い間、障がいのある学

生、支援の輪をつないできた教職員や支援に関わってきた学生の願いが実ったものです。「これまで障がい学生への理解と対応は十分とは言えないところがありました。ボランティアサークルの学生とのコミュニケーションの不足もありました。本学には特別支援教育に携わる教員を養成する課程もあります。支援ルームの発足は、学生と大学の連携という関係が生まれる新たなスタートとなりました」と語るのはセンター長の木立教授です。

支援協力学生の スキルアップ研修を活発に

現在、支援ルームにおいて、何らかの形で支援を受けている学生は6名、登録している支援協力学生は約50名です。また、支援協力学生のうち7名が支援ルームの学生スタッフとしてリーダーシップをとり、情報保障活動について話し合う学生間の会議や、研修、交流会などの活動を展開しています。研修については、初級手話講習会を週に2回、タイピング講習会を週に1回、ランチタイムに実施しています。いずれも学生スタッフが講師となり、支援協力学生のスキルアップに取り組んでいます。

これからも、本学学生が培ってきた学生による学生のための支援という精神を生かしつつ、教員養成大学ならではの「共に学び合うための支援活動」に取り組んでいきたいと考えています。また、支援ルームの設立を契機にして、本学以外の障がいのある学生の支援活動に取り組んでいる大学との連携も深まりました。今後も、このような他大学との連携の輪を拡げていきたいと思ひます。

筑波技術大学と講習会を実施

今年度、支援を希望する学生の要望の多くが、ノートテイクからパソコンテイクへと転換したことを受け、パソコンテイクができる学生を養成することが急務となりました。そこで、5月に筑波技術大学(視覚障がい、聴覚障がいのある学生のための大学)から白澤麻弓准教授を講師として招き、教職員との懇談会とパソコンテイク講習会を実施しました。白澤准教授から直接、支援協力学生らを指導していただいたことで、支援協力学生の士気が高まり、パソコンテイクのスキルもアップして、ほとんどの講義の情報保障をパソコンテイクで実施していくことができる礎(いしずえ)となりました。

6月には、聴覚障がい学生を受け入れ、積極的に支援を行っている高等教育機関で構成されている日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク(PEPNet-Japan)へも加入しました。また、これにともない、平成25年の2月22日には筑波技術大学、同志社大学が主催する地域ネットワーク事業「障害学生支援教職員研修会」を大阪大学、関西学院大学、立命館大学、関西大学と共催することになりました。実行委員会の発足以来、各大学と検討を深め、取り組みを進めてきた同研修会は、同志社大学(今出川キャンパス)を会場に実施されます。

宮教大など先進大学と連携

8月の研修合宿では、学生支援GPにより障がい学生支援に先進的な取り組みを進めてきた宮城教育大学の前原明日香・しょうがい学生支援コーディネーターを講師に招きました。同じ教員養成大学である宮城教育大学の学生として支援協力活動に携わったあと、同大学の障がい学生支援担当者となった講師の講演は、本学学生、教職員にとって、学ぶものが多くありました。

前期の活動をふまえ、改めてガイダンスの必要性を感じたこともあって、9月には安福特任教授によるガイダンスも実施しました。ここでは、障がい学生支援における国内外の動向や現状を学び、平成24年度後期から実施することになった支援活動におけるルールの説明をしました。そして、安福特任教授の専門である臨床心理学の観点から、支援協力学生が障がいのある



学生研修合宿



タイピング研修

学生を支援する意味についての講義がありました。

12月には愛媛大学で行われた日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムに支援協力学生2名と教職員が参加し、支援協力学生はポスターセッションにも2枚のポスターを出展して、本学の活動をアピールしました。支援協力学生とともに現在の日本における障がい学生支援を取り巻く状況を学び、他大学の先進的な取り組みに直に触れたことを生かして、本学の支援活動をさらに実りあるものにしていきたいと考えています。

ハードは大学、ソフトは学生

学内においては、現在、社会的に大きな課題になっている発達障がいや有した学生への支援について、教職員を対象とした講演会等を企画しました。2月6日(水) 柏原キャンパスで、発達障がいや有する学生に対する支援活動について、学生支援GPに採択され、取り組みを進めてこられたプール学院大学の松久眞実学生支援コーディネーターによる講演会が実施されます。

発達障がいの課題にも対応

現在、我が国では平成18年に国連総会で採択された障害者の権利に関する条約の批准をめぐり、障害者基本法の改正をはじめとした取り組みが進められています。平成24年度には文部科学省が障がいの有無にかかわらず、誰もが入れる大学をめざしつつ教育の質を担保するために、「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」を設置して、議論を重ね、12月には「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)」がまとめられました。今後、各大学は障がいのある学生が学びやすい環境を整備し、修学の機会を確保するため、取り組みの推進を求められるものと考えられています。

本学においても、こうした状況を背景に、支援活動をより充実していくため、学生らが集まって交流したり、さまざまな活動の拠点にすることができるフリースペースを備えた新しい支援ルーム(C6棟2階)が開設されようとしています。本学の学生たちが共に気持ちよく学び合い、より良い未来へとつながる成長の場にしていきたいと思っています。また、学内の各部署、学外の機関等の

協力をいただきながら、教員養成大学である本学における障がい学生支援の在り方を構築していきたいと考えています。



学生による活動会議



手話講習会

【今年度のこれまでの取り組み】

- ◆5/26……………筑波技術大学から講師を招き、パソコンテイク講習会を実施
- ◆6/14……………茶話会実施
- ◆7/4……………発達障害の講習会を第二部で竹田名誉教授を講師に実施
- ◆8/7・8……………学生対象の研修会を宮城教育大学特別支援コーディネーターを招へいして実施(7日には音楽会を実施)
- ◆9月末～10月上旬……………5回にわたり支援協力学生対象のガイダンスを実施
- ◆10/10～1/23……………週2回昼休み、学生スタッフによる手話講習会を実施
- ◆11/9～1/11……………週1回昼休み、学生スタッフによるタイピング講習会を実施
- ◆12/1・2……………ルーム教職員と学生代表2人が第8回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムに参加。ポスターを2枚発表
- ◆2/6……………発達支援についての講習会(柏原キャンパス)
- ◆2/22……………障害学生支援教職員研修会を同志社大にて共催
- ◆6/18、9/3、12/25、2月ごろ(予定) 支援活動会議(学生主催)

【障がい学生修学支援ルーム】

■スタッフ

【教員】

ルーム長 木立 英行 教授

コーディネーター 安福 純子 特任教授

【事務職員】

学生サービス課学生支援係

(障がい学生修学支援担当) 高田・坂口

■お問い合わせ

☎072-978-3479 (Fax兼用)

開室時間8:30～17:15

Email:

sienroom@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

手をつないで

vol.2

大阪教育大学の男女共同参画

さて今回が2回目となります男女共同参画推進会議企画専門部会のメンバーによるコラムですが、今回は本学の男女共同参画について少し紹介させていただきたいと思います。

まず本学の男女共同参画推進体制について、学長をはじめとする部局長等の構成員からなる男女共同参画推進会議(2010年6月設置)があり、同会議の下に男女共同参画推進担当学長補佐を部会長とする専門的事項を検討する企画専門部会が設置されています。主にこれらの組織が中心となって、教職員・学生を含む本学全ての構成員と共に本学の男女共同参画を推進しています。

次に施設・設備・サービス面では、育児支援設備として柏原キャンパスは附属図書館内、天王寺キャンパスは中央館内に授乳室を整備しています。また、同附属図書館内の男性用及び女性用それぞれのトイレにはおむつ交換台・ベビーキープ・補助便座を、天王

寺キャンパスの男性用及び女性用それぞれのトイレにはベビーキープを設置しています。その他、男女共同参画にかかわる相談窓口や教職員向けに財団法人こども未来財団の行っているベビーシッター育児支援事業を利用したベビーシッター育児クーポン発行事業などがあります。

最後に今後の推進計画について、本学は平成24年4月から平成28年3月まで第一次大阪教育大学男女共同参画推進行動計画の期間中です。本行動計画は「国立大学法人大阪教育大学における男女共同参画推進指針」(平成23年2月15日制定)に定める基本方針を具体化するための取り組みを示すもので、本行動計画に沿って、本学の男女共同参画推進を実行しているところです。

今後ともみなさんのご理解とご協力をお願いいたします。

企画専門部会委員 平井 良昌(人事課長)

11ある 学生相談 窓口から



すべての学生に開かれています

「勉強がはかどらない」「大学に馴染めない」「授業に行くことができない」「友達や家族、先生のことで悩んでいる」「将来がみえない」「なんとなく落ち込む」等々…。

学生時代は自らの生き方や進路選択、対人関係などについて、さまざまな悩みや疑問を抱える時代です。それを乗り越えていく過程は、学生一人ひとりの人間的な成長のための手がかりともなると考えられます。

そのためのサポート機関として本学には、ケースに応じた11の学生相談窓口があります。

このうち、最近増加傾向にある心の相談を専門的に扱っている「カウンセリングルーム」の担当者を訪ねてみました。今号では「カウンセリングルーム」の奥田紗史美さんのインタビュー記事を掲載します。
(総務広報係)

カウンセリングルーム専任職員
臨床心理士 奥田 紗史美さん

主体的に“悩む”“考える”

「カウンセリングルーム」は柏原・天王寺両キャンパスにあります。今回は専任のカウンセラーが常駐している柏原キャンパスを紹介いたします。

「ルーム」は事務局(N)棟1階、エントランスに正面から入って右奥にあります。相談に乗ってくれるのは臨床心理士の奥田紗史美(おくだ さとみ)さんです。昨年4月に赴任しました。ルームは月曜日から金曜日まで(祝日除く)の9時～17時15分まで開いています。(夏季・春季休業中含む)

「基本は予約制です。思い立ったらとりあえず来てみてください。その場で予約ができます」。ノックの勇気が出ないとき、不在のときなどは、ルーム前に設置してある「予約票」と備え付けのポストを利用してくださいとのこと。折り返し連絡があります。



“感じる”ことを大切に

「カウンセラーは、学生のみなさんが主体的に“悩む”“考える”“感じる”ことを大切にしています。カウンセラーとの1対1の対話を通して、自分の体験を見つめ、理解が深まり、みなさんが元々もっている力がより生かされることが大切だと考えています」

相談は、その内容により、短期間のコンサルテーションから、より継続的で専門的な心理療法まで、いろいろな形があります。「こん

なこと相談してもいいのかな?と迷った時でも、まずはドアをノックしてください。一緒に問題を見つめ、糸口を探しましょう」と奥田さんは優しく語ります。

「必要とする学生に利用してもらえることが大切です。でも、わたしが学生の集まっているところに行くと“あなたは支援を必要としていますか?”と聞いて回るようなことはできないのですよね」「むしろ学生・教職員に、必要な時に適宜、当ルームを発見してもらえることが重要です。しかし、前回の学生生活実態調査での認知度は20%弱しかなく、自主来談を促すための広報活動や、他の学生相談窓口からの紹介、教職員や友達からの口コミが大切だと思っています」。現在、その存在をもっと知ってもらうために、カウンセリングルームのwebページも制作中だとい



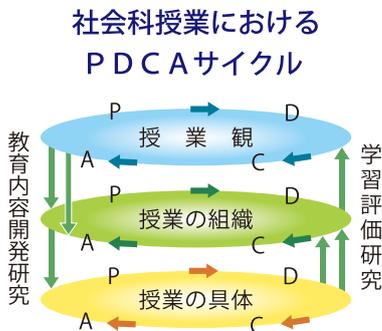
「気軽にノックしてください」

奥田さんは、広島大学教育学部心理学科卒。同大学院教育学研究科博士課程後期修了。神戸女学院大学の専任講師を3年務めたあと、本学に着任しました。大学院時代から、精神科の病院やクリニック、障がい児の療養施設、学生相談、スクールカウンセリングなどの現場で臨床心理士として働いてきました。

「教員養成大学なので、教育実習でのつまづきからおこる、自分は教員にはなれないのではという不安や幻滅、挫折感などが不調のきっかけになることも多いようです。カウンセリングは言葉による対話を中心ですが、箱庭や夢、描画など、手法は様々にあります。自分の抱えている気持ちを言葉にできるだろうかという不安もあるかもしれませんが、まずはおいでいただければ」と語ります。



社会科学習におけるPDCAシステムを開発



「PDCAサイクルが学校現場の授業の中でうまく機能していないのではないか」「教員自身は日々の実践の中で、授業をどのように省察し、評価・改善を行えばよいか」の問題意識から研究を始めました。学校や教員、学習者をとりまく状況に応じた社会科授業力向上のあり方について、教育内容や教科の固有性と絡めて追究しています。

PDCAサイクルとは、Plan(計画)→Do(実行)→Check(評価)→Action(改善)の4段階からなるマネジメントサイクルのことです。生産管理や品質管理に取り入れられるこのサイクルを授業の開発・改善に応用しています。

教員が抱く切実な課題、学習者の変容や成長を促すために、個々の教員が柔軟で継続的な授業改善をどのように図るのか、授業研究をどう進めればよいか、同僚やグループ、附属学校や教育委員会、研究者らがどのようにかわり、協働の研究組織・集団をつくらばよいか、授業力向上のPDCAのあり方に焦点を当てて実践研究を進めています。「最終段階では、一人ひとりの教員が自らの授業観を批判

的に吟味し、首尾一貫した授業改善ができるようになることがねらいです」

教科の中でも社会科は指導者によって授業観が大きく異なる傾向があります。「社会科の場合、教員個人やグループごとに授業はかくあるべきだ」という願望が強く、一人ひとりの目標達成がばらばらです。それぞれがもつ社会科観、授業観の違いが壁となってこれまでは研究が踏み込めませんでした。私自身も中学校社会科教員として長年務めていたのですが、そのことに気付けなかったのです」

香川県出身。1986年香川大学教育学部を卒業後、高松市の公立中学校教員として採用されました。18年間学校現場に身を置き、日々の教科指導や生活指導、部活動の指導に明け暮れました。その間、教材研究や学習指導の様々な実践上の課題について、香川県内の全中学校社会科教員で構成された研究会の一員として、事務局で組織をけん引しました。

教員となって5年目に、鳴門教育大学院に内地留学し、中学校教員に復帰したのち、2001年に国立教育政策研究所の評価規準・評価方法等の作成委員、その

後中央教育審議会初等中等教育分科会専門部会の委員を勤め、全国に視野を広げることができました。

「当時は、寝る間もないほど忙しかったです。でも、学校現場の実践や評価の現状について知ることができました。来年度から、相対評価から目標標準評価の導入へ、大阪府教育委員会が大きく舵を切るに当たって、これまでの経験を生かしてサポートさせていただきます」

2004年、大阪教育大学に教員として着任。「当初、社会科における評価研究をめざしましたが、なかなかまとまらず苦しみ、恩師のお導きにより、広島大学大学院博士課程で従来の授業評価とは異なる改善研究のあり方をようやく見つけることができました」

30代の頃は価値認識形状を振りかざしていたので、「周りから“かちかち山”というあだ名がついた」と笑います。現在も全国を忙しくかけ回っており、学生の間では「先生、いつ寝るの?」と不思議がられ、「鉄人」のニックネームを頂戴しているとか。

大阪教育大学で生きる学生の「今」がわかる。

STUDENTS NOW!

「震災ボランティア活動に参加して」



片岡 美幸さん
Miyuki kataoka

・教員養成課程養護教諭
養成課程2回生



本学は、昨年夏に東日本大震災被災地である宮城県に学生ボランティアを派遣しました。宮城教育大学と連携した2回目となる事業で、20人が昨年8月8日から10日までの3日間、宮城県角田市内の3つの中学校で、同市内の児童・生徒を対象に、夏休みの課題の学習支援を行いました。

片岡さんは派遣メンバーの一員として参加し、小学3年生の指導を担当しました。子どもたちとの初対面はぎくしゃくしたものであったといいます。「えー、だれ!という反応で、わたしたちも、どうしよう!といった感じでお互いに戸惑っていました」「でも打ち解けてくると、本当に真面目な子どもたちで、とても教えやすい環境でした」

活動では主に算数を教えました。「教えることの難しさを感じました。教えた答えが間違っていたことを後になって気づき、説明し直した失敗もあります。事前にしっかりと準備しておかなければと反省しました」

「また、学習支援を午前中だけでなく、せめて5日間するか、午後に子どもたちと

の交流の時間がほしかったのが正直な気持ちです。3日間だと、ようやく打ち解けた頃に別れなければならず、とても心残りでした」

「支援は一度限りのものではなく、長く続けてほしい」——これが宮城教育大学からのメッセージです。「この支援を継続的かつ有意義なものにするためには、わたしたち学生が目的意識をしっかりと持って参加・行動することが必要だと強く思います」

時間を見つけて、石巻市内の被災地に足を運んだそうです。「被災地では震災の傷跡が強く残っていて、360度見渡しても何もない、その光景に立ちすくみました。自分の目で見ないと分からないことがあると痛感した瞬間でした」

その後、昨年11月3・4日の宮城教育大学で開かれた震災復興を考える全国的なフォーラムにも参加。「つながりを持った教育復興、復興教育と地域創造」をテーマにした事例報告や研究協議会などのイベントに加わりました。会場では、被災した女子学生と仲良くなりました。宮城県出身で、現

在は山梨県の大学で学んでいます。その彼女から大阪教育大生にむけての言葉が届きました。「～私自身、大好きな宮城のために今何ができるか考えています。大阪教育大学の皆さんにも被災地の方のことを忘れないでほしい」と。関西では震災の報道が少なくなりました。「自ら積極的に情報を得ようとしないう限り、震災も過去のものになってしまいます。大阪教育大生には今もそこで暮らしている人たちがいること、地元を離れて暮らしている人がいることを忘れないでほしい。そしてわたしが学んだこと、感じたことを伝えることがわたしのできることです」と力説します。



大阪教育大学で生きる学生の「今」がわかる。

STUDENTS NOW!

「夢は宇宙で音楽ライブ?」



イーゼル芸術工房代表

竹下 壽晃さん

Hisaaki Takeshita

◆大学院音楽科教育学専攻

竹下さんは、ライブパフォーマンスなどを行う芸術家集団「イーゼル芸術工房」の代表を務めています。

「イーゼル芸術工房」の拠点は、柏原市内の近鉄大阪線「大阪教育大前」すぐ、国道沿いにある3階建ての建物です。芸術で生きていこうとする20代のメンバー7人が共同生活をしながら活動しています。大半が本学卒業生と在大学生です。

福岡県出身。中学生の頃からギターを始め、学部在学中はジャズ研究会に所属していました。今は、音楽家として歩んでいます。「卒業後の進路を決めるに当たって、よく自身、教員か、それともミュージシャンかと迷いましたが、周りに面白いことをやりたいという友人が多くて」

音楽ライブや小説の出版、革製品の制作など、「それぞれの芸術活動で得た収入だけで生活することを暗黙のルールにしています」

「音楽でメシを食っていきたい」と、2005年に立ち上げたのが芸術家派遣団体でした。大阪市内のホテルに飛び込み営業をかけて週2回のジャズコンサートを始めま

した。ホテル関係者の紹介や口コミで仕事の幅が徐々に広がりました。09年から柏原市に活動の拠点を構え、共同生活を始めました。

その年の冬、淀屋橋でのストリートライブを見ていた通天閣観光の関係者に、通天閣でのライブをしてみないかと誘われました。そして、イーゼル芸術工房のメンバーが、今年100周年を迎えた通天閣初のオフィシャルバンド「通天交響楽団」としても活動することとなりました。

今年6月に引退した2代目ビリケンさんもメンバーに加わり、100周年を記念した公式ソングを制作しました。同年には、地元である柏原市長を表敬訪問し、ビリケンさんが一日市長に就任しました。

地元・柏原市にこだわっていることについて、「大阪教育大学の学生は地元の柏原市に出て行かないと言われています。わたしたちが架け橋となって柏原市と連携を広げていかなくてはならないのではと思っています」

柏原市が東日本大震災発生当初から岩手県・大槌町を支援し続けていることか



ら、今年9月、同市で寄付された義援金を大槌町に届けました。被災地では、「福幸きり商店街」で復興支援ライブ、病院でもコンサートを行いました。「被災地の方々が一人も喜んでいただければと一生懸命演奏しました。非常に喜んでいただきました。震災から1年半、町は何もかもなくなっていました。道端で泣き崩れている人の姿も見ました。メディアが潮を引くように去りましたが、被災地を忘れてはいけなくと強く感じました」

2013年も、ビリケンさんを前面に出した企画を考えていきたいと思っています。「夢は国際宇宙ステーションでライブ? をすること」だといいます。



CATCH!

海内 佑典さん
Yusuke Umiuchi

- 28歳
- 中学校教員養成課程英語教育専攻卒
- 門真市立門真はすはな中学校教諭 英語科担当



全力を出せば道は開ける

講

師経験3年を経て、昨年度、念願の教員採用試験に合格しました。初任1年目です。勤務校もオープン1年目の新設校。門真一中と六中が統合して、校名も新たに地域に由来した「門真はすはな」とネーミングされました。

澤田京子校長は「本校は若い先生方がたくさんおられます。学校全体で新しい学校をつくるのだと気概もっています。みんなで若手を育てよう」と一致し、職場研修に力を入れています。若手教員のリーダー格に育てほしい」と期待をかけます。

子どもの頃から、英語の歌や外国映画が好きだったとのこと。「中学校生活を振り返って、お世話になった先生や仲のいい友達に恵まれ、充実した楽しい3年間でした。それで、中学校教育に関わりたと思うようになりました」。教えることも好きだったので、将来の仕事を考える高校時代、進路を中学校教員に絞りました。「大阪で教職をめざすなら迷いなく大阪教育大学を選びました。1年浪人しましたが、心はぶれることはなかったです」

大学卒業後、泉佐野市の中学校で2年間講師を務めました。そのあと1年間、オーストラリア・シドニー市に語学留学しました。

勉学の傍ら、ボランティア活動で日本語教師のアシスタントをしました。「韓国、中国などからの留学生も多く、いろいろな国のの人たちと交流し、旅行もたくさんしました」

帰国して1年間、門真市で講師をつとめたあと現任校に採用されました。

1年目から、1年5組の担任を命ぜられました。「日々、難しさを感じています。こうなしてほしいという、わたしの思いが生徒にうまく伝わらないこともあります。生徒、保護者とのコミュニケーションを密にしようと努めています」。ただ、子どものことで解決すべきことがあれば、ひとりで考え込まないようにしています。「周りの先生方の話をよく聞いて、常に助けてもらっています。学級運営や授業研究など、同僚の先生方のアドバイスは何よりの励みです」

広報担当者が訪れた12月19日(水)は2学期最後の英語授業でした。デジタル教材とIT機器で、単語の発音のトレーニングをする指導を展開しました。「語学留学で滞在したオーストラリアでの経験は、英語授業の中で生かされています。外国で撮影した珍しい写真や、オーストラリアの子どもたちが日本語を一生懸命に習っていることなどを紹介すると、驚いてくれます。わたしの体

験が、子どもたちの外国への関心を少しでも高めることができたらと思っています」と微笑みます。

大教在学中は、サークルの「フォーク集団ぺんぺん草」で活動しました。後輩の学生には「大学時代は自分で勉強しないといけないので、やるかやらないかは自分次第。将来の進路に役立つ勉強はしっかりしたほうが良いと思います。わたし自身、学校現場に出てみると、もっと勉強しておけばよかったと感じることが多いです」。自身の経験から、「教育実習が一番試練だった」と振り返ります。教職をめざす学生には、「事前学習では徹夜もしたし、学校に遅くまで残りました。友だちと面接練習もしました。教師になるための努力とエネルギーは、全力を出せば道は開けるという自信につながるはずです」とエールを送ります。





01 アメフト部、初の1部リーグに昇格へ

本学体育会アメリカンフットボール部ドラゴンズは、昨年12月9日(日)に神戸市立王子スタジアムで、同志社大学との1部入れ替え戦(関西学生秋季リーグ)に臨み、10-7のスコアで勝利し、初の1部リーグ昇格を決めました。

関西学生リーグ2部Bブロックで2年連続全勝優勝。1部校との入れ替え戦に臨み、硬いディフェンスと果敢な攻めで勝利をつかみました。両チームそれぞれ1度のタッチダウンによりゲームは7対7

で終盤に入り、第4クォーターで同点、残り27秒で引き分けかに見えた場面で、決勝となるフィールドゴールを決めました。

02 柏原市民と本学学生、教職員が「第九」10周年を共演

本学と柏原市との提携芸術文化プログラムである「第九交響曲」「歓喜の歌」の演奏会を12月16日(日)、柏原市・リビエールホールで開催しました。大学と地元市とが連携した全国でも例にないイベントで、今回で10回目を迎えました。当日は、

本学学生オーケストラと大学教職員、市民の歌声がつくりだす共演を、市民約800人が鑑賞しました。

03 メンサポJISSに新ロゴマークが誕生



本学学校危機メンタルサポートセンターはJISS(日本International Safe School(ISS)認証センター)のロゴマークを策定しました。

ロゴマークのコンセプトは、地球の中に日本地図を入れ、人々が学校に守られている様子と組み合わせることで、『世界の中の日本』、そして『学校安全』を見ただけでイメージできるように表現しました。また、大人に見守られながら、子どもたちがスクスクと成長していく様子も表現しています。

読者の広場

大教大のことがとてもよくわかり、子どもの大学生活に関して、安心できます。また、自分の仕事も学校教員であり、とても参考になります。

(本学保護者)

お世話になった先生方の御活躍が知れて嬉しいです。そんな先生方や先輩方のように、更に子どもたちのために頑張っていきます!!

(本学卒業生)

就職活動の指導についての記事に興味があります。学生自身が前向きに取り組まなければなりません、ご指導の程宜しくお願いします。

(本学保護者)

大教大でつながるいろいろな人々の熱い思いとたゆまぬ努力がよくわかり、はげまされました。

(本学保護者)

本誌にご意見をお寄せください。

今後の誌面づくりに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.24 webアンケート



「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。



本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。この印刷物は、12,000部を541,200円で、すなわち1部45.1円で作成しました。



◀キリトリ▶

郵便はがき

5 8 2 - 8 7 0 5

(受取人)

大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1

大阪教育大学管理部

総務企画課 行

料金受取人払郵便

柏原局
承認

1

差出有効期間
平成25年9月
31日まで

切手不要

※該当する番号を○で囲んでください

あなたのご所属を教えてください

- | | | |
|-----------|----------|----------|
| ①本学学生 | ②本学卒業生 | ③本学保護者 |
| ④本学教職員 | ⑤附属学校生 | ⑥附属学校保護者 |
| ⑦附属学校卒業生 | ⑧附属学校教職員 | ⑨名誉教授 |
| ⑩教育委員会関係者 | ⑪他大学教職員 | ⑫他大学学生 |
| ⑬その他 () | | |

▶キリトリ◀